

又長尾鶏なる漢名に就て成すものあり、曰く長尾鶏は尋常の家鶏よりも尾羽の少しく長きみのひきの漢名にしてさなみに充用すべきものにあらざるべしと。然れども、動物の進化及び趨化性より考ふるに、長尾鶏は恐らくみのひき及びさなみの總名にして、彼のしらふちといひほうわうまるといひ、悉く其の變態と認むること穩當にあらざるなきか、記して以て後日の備考とす。

小笠原島旅行談(演説ノ要旨)

脇水 講師

余ハ去明治三十八年六月十五日ヨリ二十二日マデ小笠原島及ビ硫黄島方面ニ旅行セリ其目的ハ其前年十一月南硫黄島附近ニ噴出セシ新火山島ヲ視察スルニアリキ。

小笠原父島ハ横濱ヲ去ル海上五百三十海里南硫黄島ハ七百四十海里ニシテ父島横濱間ニハ毎月一回定期航海船ノ往復スルアリ而シテ毎年一回(大抵六月)航路ヲ硫黄島列島ニ延長スルヲ例トス余ノ新火山島ヲ視察セシモ此機會ヲ利用シタルナリキ。六月五日午後二時定期船兵庫丸ニ便乗シテ横濱ヲ出帆セシガ、八丈島附近黒潮ノ流ル、邊ハ稍浪立チタレドモ其他ハ凡テ穩カニ翌日午前六時八丈島神湊ニ着セリ。上陸シテ附近ヲ視察シ、午後六時再ビ此地ヲ發シ、翌日晝頃先年破裂シテ有名ナル鳥島ニ寄航シ、程ナク出帆シテ八日午後二時小笠原父島ノ二見港ニ投錨セリ。小笠原列島ハ大小二十四ヶノ島嶼ヨリ成リ、是等ハ三ヶノ群島ニ分タル、北ニアルヲ智島群島、中ナル

ヲ父島群島南ニアルヲ母島群島トス。三群島中父島ヲ最モ緊要ナルモノトス、是レ二見港ナル良港アルガ故ナリ。此灣ハ周回七里位ニシテ灣内水深ク三千乃至四千噸ノ大汽船モ優ニ入港シ得ルノミナラズ四方圍ラスニ高嶺ヲ以テスルヲ以テ灣内波穩ニシテ實ニ天與ノ良港ヲナシ將來我が國ノ南洋ニ向テ發展スル屈竟ノ足場タルノミナラズ軍事上ニ於テモ重要ノ地點タリ。現今ニ於テハ内地トノ間ニ海底電線ヲ通ズルモ其當時ハ是等ノ設備ナク、當時ハ恰モ露國バルチック艦隊東航ノ際ニテ或ハ小笠原ヲ襲フテ根據地トナスヤノ説ヲナスモノアリ、民心競々トシテ内地ノ音信ヲ鶴首眺望セシ折柄、我兵庫丸ハ日本海海戰大勝利ノ吉報ヲ島民ニ傳ヘンガ爲メニ殊更ニ滿艦飾ヲ施シ花火ヲ揚ゲ威風堂々トシテ入港セシカバ之ヲ見タル島民ノ狂喜ハ如何バカリゾ、爭テ端艇ヲ飛バシ獨木舟ヲ操リ兵庫丸ニ蟬集セリ。此時同乗ノ朝日新聞社員ハ大海戰捷報ノ號外數百枚ヲ撒散ラシテ戰勝ヲ報シタルハ時ニ取リテノ好處置ナリキ。是ニ於テ島民ノ喜ハ絶頂ニ達シ、翌日ハ本邦人モ歸化人モ皆共ニ提灯行列ヲナシ、大村小學校内ニテ一大祝捷會ヲ開キ、余等一行モ大ニ歡待ヲ受ケタリ。

父島ハ地勢、山多ク平地少ク、僅ノ平地モ常ニ海風ノ害ヲ被ルヲ以テ米ノ産ナキナリ。作物ハ僅ニさとうきび、甘藷、「バインアップル」、「バナ」、「等ニシテ、甘藷ハ味淡泊ニシテ島民ハ之ヲ常食トス果物ハ之ヲ内地ニ輸送ス味美ナリ。林木トシテハいちび、あかてつ、せんだん、あかう、やろう

Yellow wood ナ註 たまな、もまたまな、ろうすうどう (Rose wood ナ註) はまやかり等繁茂ス。たまなハ
 リテカク云フナリ) 琉球ノふくぎニ似テ潮風ニ抵抗スルコト強ク、防風林トシテ栽培セラル。其他全島至ル所ニびろ
 う、のやし、たこのき林立シ、へご、まるはち等ノ如キ羊齒科植物及び蔓生植物之ニ交リテ所謂熱
 帶植物景ヲナセリ。特産ノ桑ハ内地ニ於テ大ニ貴重スル所ナルガ維新後亂伐ノ結果現今ニ於テハ
 母島ノ石門山ト桑木山ト二ヶ所ニ僅ニ殘存スルノミ大木ハ周圍二十尺乃至三十尺ニ達スレドモ幹
 莖約ネ朽チテ洞屈ヲ作レルアリ、目下ハ保安林トシテ大切ニ保存セラル。大村ナル島廳ニテハ天
 井壁板等ニ惜氣モナク桑材ヲ用キアリ以テ其管テ多量ニ存セシヲ知ルベシ。
 風化水蝕ノ兩作用劇シクシテ山嶺ハ多ク尖リテ針ノ如ク傾斜頗ル急峻ナリ、サレド著シキ高山ハ
 ナク、父島中ノ最高点モ海拔一千尺余ニ過ギズ。此等ノ山岳ヲ生成セル岩ハ安山岩凝灰岩等凡テ
 火山質ノ岩ナリ、學術上珍ラシキ Boninite (此名ハ小笠原島ヲ無人) ハ大村附近ノ安山岩質塊岩中ニ
 球塊トナリテ存ス、其他輝石安山岩アリ石英粗面岩アリ、此等ノ岩石風化スルヤ血紅色ノ堅キ粘
 土質土壤トナル之ヲ紅土 Laterite ト稱ス、蓋シ日射烈シク雨多キガ爲メニシテ印度ノデカン半島
 楊子江以南ノ南清地方臺灣南部等ニモ同様ノ土壤ヲ見ル。
 父島ノ南端ナル南岬邊ニ黃鐵鑛ノ美ナル結晶アリ石膏及沸石類ト共存ス、又古キ珊瑚礁ヨリ成レ
 ル石灰岩アリ。

二見港内ノ海底ニハ珊瑚礁ノ生成スルアリ、海水透明ナルガ故ニ海面ヨリ透視スルヲ得。コノ珊
 瑚礁ハ碎ケテ濱ニ打チアグラレテ濱ハ眞白ニ見ユ、又大村邊ニハ砂利ナキガ故ニ白珊瑚ノ破片ヲ
 道路ニ敷ケルナド頗ル奇觀ナリ。

又父島ノ海濱ニ浮石ノ夥シク漂着シ附近ノ海面ニモ所々ニ浮石ノ大集團浮ビ居リテ海面モ爲メ
 ニ黄色ニ見ユルハ前年十一月ニ南硫黃島ノ附近ニ噴出シタル新火山島即チ今回旅行ノ目的物タル
 新火山ヨリ流レ來タルモノナリ、此等ノ浮石ハ昨年十二月頃ヨリ夥シク漂着セリト云フ。

母島群島ハ母島及ビ姉妹姪等ノ諸島ヨリ成リ、中母島最大ニシテ父島ヨリ廣ク (父島二千二百七十
 十町) 山モ高キモノアリ中央ニ高ク聳ユルヲ乳房山ト云ヒ高サ一千七百尺父島ト同ジク一體ニ山
 地ニシテ平地ナシ、植物景地質等モ父島ト同様ナリ、併シ Boninite ハコノ島ニハナシ又父島ニナキ
 モアリ即チ貳錢銅貨大ノ大形ノ有孔蟲類ナル貨幣石 Nummulites javanus ヲ有スル凝灰岩是ナリ
 母島ノ沖港ヨリ南方半里位ノ「ココナツト、ビーチ」ノ絶壁其他二三個所ニ露出ス、此貨幣石ハ第三
 紀古期ノ特有化石ナレドモ内地ニハ産セズ。此邊一体ニ風強ク海濱ノ樹ハ幹曲リテ直立スルモノ
 ナリ又高キ山ノ上ニアルモノモ潮風ヲ浴ビテ枯ル、モノアルヲ見タリ。

コノ風ニツキテ一奇談アリ、或一壯年東京ニ來タラント欲シ前月兵庫丸ノ廻航セシ折竊ニ家ヲ
 出デ、之ニ乗船シタリ。家人等兵庫丸ノ母島ヲ拔錨セシ後之ヲ知り其未ダ父島ヲ出帆セザル前ニ

之ヲ押ヘントシ、四人ノモノ一葉ノ「ボート」ヲ浮ベテ母島沖港ヲ乗出タリシガ、暫クシテ風浪起リテ「ボート」ハ轉覆シ二人ハ溺死シ他二人ハ舟ベリニスガツ舟ヲ元ニ復シ辛ジテ溺死ヲ免カレタレドモ舟中ノ艙楫等皆海中ニ失ヒタル故ニ舟ヲ行ルニ由ナク唯風浪ニ任セテ漂流セシガ空腹ノ爲メニ遂ニ懷中ノ銀貨ヲ嚙ミテ僅ニ渴ヲ慰メタリト云フ。カクテ一週間ノ後遠方ニ島見エ次第ニ近ヅキヌサレド風ト浪トノ工合ニテ沖合五六町ノ所ヲ漂フノミニテ岸ニ漂着セズ、其中ニ二人共人事不省トナリタリ、此所ハ母島ヨリ海上九十海里ヲ隔ツル北硫黃島ニシテ幸ニ島人ノ或者他村ニ用達セントテ偶々、途ニ漂流船アルヲ發見シ遂ニ其救フ所トナリテ幸クモ一命ヲ拾ヒタリト云フ。余等ノ乘リタル兵庫丸ノ北硫黃島ニ廻航セシ時其二人ハ之ニ便乘シテ母島ニ歸リ余ハ圖ラズモ當人ヨリ右ノ實話ヲ聞キタルガ此邊ノ海上ニテハ斯ル出來事ハ決シテ稀ナラズト云フ。

硫黃島探檢談（演說ノ要旨）

脇水 講師

硫黃島列島ハ北緯二十四度〇分ヨリ同二十五度二十五分、東經百四十一度〇分ヨリ同百四十一度三十分ノ間ニ殆ント南北（北十二度西）ノ方向ニ並列セル三火山島ヨリ成ル。三島中中央ノモノ最大ニシテ之ヲ中硫黃島或ハ單ニ硫黃島ト云ヒ、南ニアルヲ南硫黃島、北ニアルヲ北硫黃島ト云フ。最北ノ北硫黃島ハ小笠原母島沖港ヲ去ルコト西南九十海里ニシテ最南ノ南硫黃島ハ夫ヨリ南

方更ニ九十海里ノ洋中ニ在リ。外國人ハ硫黃島列島ノコトヲ火山列島ト稱スレトモ、元來日本ノ如キ火山島多キ所ニテハ火山列島ナル名ハ普通名詞ト混同サル、恐アレバ寧ロ硫黃島列島ト呼ブヲ可トス。

北硫黃島

予ノ此ノ列島ヲ探檢セシハ去明治三十八年六月ニシテ予カ乗船兵庫丸ハ六月十七日小笠原母島沖港ヲ出港シ、約九十海里ノ所ヲ一晝夜ヲ費シテ北硫黃島ニ着ケリ。此島ハ周圍三里面積五百四十六町歩、海拔二千五百三十四呎ノ一火山突如トシテ海中ニ屹立セルモノナリ。北方ヨリ見タル形ハ左方ニ最高部アリ、其頂上ニハ一火口アリト傳ヘラルルモ、實際之ヲ調べタルニ非ズシテ其形ヨリ想像スルニ過ギズ。海圖ニハ火口ノ南方ニ開ケル見取圖ヲ描キアレトモ予カ之ヲ南方ヨリ望ミタル時ハ不幸ニシテ山頂密雲ノ掩フ所トナリ之ヲ確ムルコト能ハサリキ。全山悉ク火山岩ヨリ成リ、山腹ハ四周懸崖絶壁ヲナシテ直チニ海ニ終ル。絶壁ニハ立派ナル岩脈ノ所々ニ露出スルヲ望見シ得ヘシ。然シ予ノ上陸シタルハ島ノ東岸ナル石野附近ノミニシテ山上ニハ登ルコト能ハサリキ。石野村ハ明治三十二年四月八丈島ノ人石野兵之丞氏初メテ開墾ニ着手シ、爾後年々移住者ヲ増加シ、予ノ至リシ時ハ東及西ノ石野村ニ三十六戸百七十八人ヲ算スルニ至レリ。予ハ先ツ小學校ニ案内セラレタリシガ、建物ハ僅ニ二室アルノミニシテ一ハ教場他ハ教員室兼事務室ニ充テラレ